

Title	対話の場所でのじみだすもの
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23009
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

対話の場所で にじみだすもの

辻明典

ちょっとだけ覗いてみよう。最初はそのような軽い気持ちしかもっていなかった。ふらっと足を運んだだけだったのに、私はその温かな雰囲気の一瞬にして引き込まれてしまったのだ。私はこの時間が大好きだった。時間が経つのを忘れるとはこのことなのかもしれない。ここで私が得た感覚は、子どものころに日が暮れるまで遊んだ頃のものに似ているのかもしれない。そして初めて参加したその日の帰り道には、もう一度行きたいと思っていたのだ。

もちろん、何人もの外国にルーツをもつ方々と、ゆっくりとそして複数回にわたって語り合うなど、生まれて初めての体験だ。そしてこの居心地のよい雰囲気。お茶を片手にともに言葉を交わし、その傍らで子どもたちがはしゃぎ声をあげている。大人がじっくりと話しているすぐそばで、幼子たちが戯れているのだ。それ自体がもちろん新鮮なのだけれども…いや、ちょっと待てよ？　ここまで書いて思い出した。大人たちが真面目な話をしているのを見ながら子どもたちが戯れているなんて、よくあった光景ではないのか？　私の実家は商店街の一角で商いをしていたので、大人たちが仕事について真面目な話をしているすぐ横で遊んでいたものだ。私に懐旧の情をかき立てる光景が、そこにはあった。

私が埋もれていた日常は、くたびれたと

言わんばかりの木製の机の上に、無造作においてある湿った画用紙の上になかった。ここで出会った人たちは、その古びた机に趣を与えてくれる。部屋には除湿器を入れてくれたのかもしれない。からっとした空気が画用紙から湿り気を取り除いてくれた。前よりもずっと手触りがいい。とにかく心地よい手触りだ。

この場所で私が見つけたのは、語る人の内側と外側からにじみでる感情の手触りだ。例えば初対面の方へと向ける挨拶。私の生活に組み込まれてしまった挨拶、特に初対面の方にかける挨拶は、定式化された言葉と軽い会釈の組み合わせでしかない。私を取り巻く日常において、初対面となる人との身体的接触をする機会は皆無であると言っても過言ではない。初めて覗いた語り合いカフェで、私は同じテーブルの人から握手を求められた。いつもの私なら軽く頭を下げ、味も素っ気もない言葉で自分自身を説明するだろう。それは私にとってはほんの些細な日常の一コマで、忘れられる過去となるはずだった。だが握手という身体的表現が、そのシーンを全く別のものへと変えたのだ。挨拶という日常的な営み。たった一つそれだけを取り出したとしても、ここにいる人たちから見れば、まったく違った世界が広がっている！　握手に不慣れた私は、一瞬だけ躊躇してから手を差し出す。その一瞬のためらいは、握手という不慣れた行為に対して私が抱いている感情に起因している。

にじみだす感情。感情は語られた言葉からも、語ろうとする沈黙からもにじみでる。

感情は咽喉の奥からのみ発せられるのではない。緩もうとする口元からもにじみだし、ぎゅっと握った掌からもにじみだす。感情がにじみだす、またはにじみだそうとする一瞬一瞬を垣間見るたびに、私は目の前の人から語られた言葉や、その表現に、あつという間に引き込まれてしまう。にじみでる感情は、なぜか人間くさい。

その場所からにじみでるような人間くさいさが、私を惹きつける。そしてこの場所で語られた言葉には、ここに居合わせた人たちの感情が託されていた。しかもそれは、小刻みに波うつ振動なのだ。さざ波のように揺れ動く振動は、私たちの身体に刺激を与えてくれるらしい。語られた言葉は感情をはらみながら小刻みに揺れ、だれかの口元を緩ませたり、閉じられた口を開かせたり、ぐっと上体を前のめりにさせたりするのだ。あそこで生まれた言葉は、まるで人肌のような温かさでぬくぬくとしている。最初の頃の私は、それにおそろおそろ指先だけで触れていた。そう、最初は指先だけで触れていた。その温かさは指先から私の体中を駆け巡った。今度は手のひらで触れてみた。その次は握手をした！

この場所に満ちようとする感情の波。その波はどこか温かい。そしてその揺れ幅は大小さまざまだ。その中には私が常日頃接している波とよく似ていて、一見すると見間違えてしまいそうなものがあるのだ。だが似ているように見えて、少しだけ違う。似ているものの間にも、ほんの少しのずれがある。それはほんのわずかなずれなのだ。それは、ここにいる人たちとじっくりと語

り合わなければおそらく見過ごしていたであろうはずの、ほんのわずかな差異である。その差異が垣間見えかけたとき、私の過ぎ去るはずの日常は一瞬立ち止まらざるを得ない。私たちの間にはほんのわずかな差異が横たわっていて、それはいとも簡単に見過ごされてしまうのだ。気にも留めずに過ぎ去っていく私の日常に、立ち止まる時間が与えられた。私が気にも留めずに置いてきぼりにしてきたもの。これまで私が気にも留めることがなかったことが、すぐ目の前で話している人からはこのように見えるのか！ わずかな差異が垣間見えたそのとき、じわりとにじみでるものがある。そのじわりとにじみでるものに触れかけたとき、私からも何かがにじみだす。そしていつの間にか私は、語り合いカフェが生みだす雰囲気引き込まれていた。

ここまで思いのままにつらつらと綴ってしまった。生硬な拙文には、ただただ恥じ入るばかりである。語り合いカフェで生まれたものを、なんとか表現できないのかと、筆を置いた後も思案を重ねている。

そして最後になりましたが、語り合いカフェでお会いできたすべての方々に、心よりお礼申し上げます。あのような和やかな雰囲気の中でじっくりと語り合う時間を分かち合えたことは、忘れたくない経験となりました。

(つじ あきのり)